15

緒方洪庵と適塾に宿るフーフェラントの精神
――日独交流150周年をふりかえって――

鈴木　重統
北海道大学医療技術短期大学部／介護老人保健施設愛里苑

はじめに

1861年オイレンブルク伯爵が江戸幕府を訪れ，日独通商条約を結んでから昨年2011年は150年にあたり日本各地で記念行事が行われた．奇しくも1861年（文久元年）は，緒方洪庵がフーフェラントの「医戒」を訳し終えた年であり，この一世紀半の歴史のなかで日独医学交流の礎ともなったフーフェラントが緒方洪庵と適塾に与えた影響について考察をくわえたい．

フーフェラントの生涯　～開業医から大学教授―医学部長―「医戒」の出版～

フーフェラント（Christoph Wilhelm Hufeland 1762～1836）は，開業医から大学の医学部教授となり，さらにベルリン大学の創立にも関わった内科医である．彼の開業医時代に培われた倫理観が後世に燦然と輝き，しかも日本にまで影響を及ぼすことになろうとは，彼自身想像もしていなかったに違いない．

彼がイエナ大学を経てゲッチンゲン大学を卒業し，失明した元医師の父親と母親をはじめ四人の兄弟の面倒をみながら開業していた1780年代のワイマール公国はいわゆる疾風怒涛（シュトルム・ウント・ドランク）の時代の真っ只中にあり，彼の患者には，ゲーテ，シラー，ウィーラント，ヘルダーなどまさにその時代の申し子がキラ星のようにひしめいていたことは特筆に値する．

ワイマール憲法の栄えをになうワイマールでは，カールアウグスト公を中心としてゲーテ，シラーなどとともにその主治医にあたるフーフェラントも交えて毎週金曜日の夜は懇話会が開かれるのが常であった．その会合でフーフェラントが「長寿法」について述べたとき，カールアウグスト公はいたく感動し，文部大臣の役目をしていたゲーテをよび，「彼は町医者として我々を診るだけではもったいない．彼の才覚や学識は大学教授にむいている．イエナ大学の教授にしなさい．」と申しわたした．1793年の復活祭のころとされている．その後1810年にベルリンにフンボルト大学が創立されたとき，彼は招聘（Ruf）をうけて医学部の教授となり，「Enchiridion Medicum」（医戒）を著し，これがのちに緒方洪庵の適塾において「扶氏経験遺訓」（注：扶氏とはフーフェラント＝扶歇蘭土の頭文字をとったもの）として永く塾の教えとなる．

緒方洪庵と適塾とその時代背景および後世に与えた影響

緒方洪庵が大阪に「適塾」を開いたのは天保9年（1838）である．「扶氏経験遺訓」の一節に「医術は，いとも崇高な技芸のひとつであり，その責務は宗教と人間愛の最も聖なる掟と一致する」とあるように彼の医学倫理の根底にはキリスト教的愛の掟があり，蘭学時代の日本の仏教や儒教道徳とはなじまなかったかもしれない．しかし他方では，「道徳的」といわれる面，とくに営利を無視して人を助けるという彼の高邁な理想は洪庵が適塾を中心に種痘を無料で広めることを実践した（1849）ことにもあらわれている．こうした思想は適塾で学んだパイオニアのみならず，1915年（大正5年）から版をかさね1975年（昭和50年）を最後に絶版となった「内科診療の実際」（南山堂）の扉にまで記されて後世の日本の医師に多大の影響を与えている．